

# バイリンガル韓国人中高生における 「のだ文」の習得状況

朴 良 順\*

---

## 目 次

---

1. はじめに	5.2 エラーの判定基準
2. 先行研究	5.3 作文とインタビューの調査結果
3. 調査概要	5.3.1 全体的なエラーの傾向
3.1 インフォーマントの構成	5.3.2 「のだ文」の使用頻度
3.2 調査の枠組み	5.3.3 日本語の「のだ文」の使用形式
4. 選択テストの調査内容とその結果	5.3.4 韓国語の「짓이다文」の使用形式
4.1 選択テストの調査内容	5.3.5 滞日期间による「のだ文」の使用実態
4.2 選択テストの調査結果	
5. 作文とインタビューの調査内容とその結果	6. まとめ
5.1 作文とインタビューの調査内容	

---

---

## 1. はじめに

植民地時代前後に来日し、永住している在日コリアン1世とその子孫、いわゆる「オールドカマー」に対し、近年、ビジネス・結婚・留学などで来日した韓国人とその家族、いわゆる「ニューカマー」も年々増えつつある。生越（2005）によれば、オールドカマーの場合、母語維持能力の低下と共に日本語モノリンガル化が進んでいるという。これに対し、ニューカマーの場合、日本で生活していながらも、日本語と韓国語の二言語による言

---

\* 숙명여자대학교 강사 일본어교육

語生活を余儀なくされている。特に、臨界期前後に来日した子供たちは、母語が完全ではない上に、第2言語の状況に置かれ、場合によってはどちらの言語も習得する必要がある。このようなニューカマー韓国人子供たちは、「東京韓国学校<sup>(1)</sup>（新宿区所在：以下、B（バイリンガル）学校と略称する）」という民族学校に通う者が多く、日本語と韓国語によるバイリンガル教育を受けている。

本稿では、オールカマーのような永住者とも、臨界期を過ぎてから来日した留学生などの成人とも異なる、バイリンガルの教育を受けた韓国人中高生（以下、バイリンガル韓国人中高生と略称する）を対象とし、日本語学習者にとって最も習得しにくいと言われる「のだ文」<sup>(2)</sup>の習得状況を考察していきたい。彼らは未就学児、小学生、中学生など来日時期がそれぞれ異なるため、日本語能力においても差異が見られる。すなわち、日常生活に不十分な者からネイティブ並の者までさまざまであり、滞日期間による「のだ文」の習得状況を横断的に考察できると考えられる。

これらをふまえ、滞日期間による「のだ文」の使用頻度および使用形式を分析し、「のだ文」をどのように習得しているのかその習得状況を明らかにする。

## 2. 先行研究

「のだ文」の研究は、これまで大きく3つの研究が平行し行われてきた。一つは、「のだ文」の本質についての議論（田野村1990、野田1997など）、一つは対照研究の観点から「のだ文」の相違点を取り上げた研究（宋1998、崔2006など）、一つは日本語教育の観点から「のだ文」の習得に関わる研究（野田2001、山内2004、伊豆原1997、최진희・조남성2007など）である。これらの研究はいずれの側面からも、「のだ」をつけるかどうかは話し手の主観的な判断や態度と関わっており、その意味機能においても複雑であるという。特に、野田(2001)では、「のだ文」が難しいのは、文の中だけの情報では決まらず文の外の情報が絡んでくることとおおく、難易度からみると文の中に「なぜ、どうして」などのような手がかりがある場合は習得しやすいと指摘している。

一方、宋（1998）と崔（2006）では、日本語の「のだ文」に対する相当形式として

(1) 東京韓国学校は、韓国系民族学校4校の一つ(大阪2校、京都1校、東京1校)。中1～高3年のA/B 2クラスずつの男女共学で、1945年に創立された。付設小学校もある。教科科目の構成は、韓国の教育基準に従っており、「日本語」「日本社会」「科学」などは日本の教科書を使用し、日本語で授業を行っている。教師は、韓国からの派遣教師と現地教師がおり、現地教師は日本語と韓国語のバイリンガルが多い。

(2) 「のだ」形式は、「の(ん)」に「だ / です / ではない / ですか / ですが」などの形式をとる。

「것이다」があげられている。「것이다」は、「것[の]」 + 「이다[だ]」の結合形式であり、意味領域に若干差があるものの、構造的な面からも機能的な面からも類似していることは否定できないとの結果であった。これに従い、本稿では「のだ文」と「것이다文」は同じ形式と扱っていく。

さらに、「のだ文」は「のだ」をつけていない形式との使い分けが重要である。すなわち、「のだ文」と対立する形式としては、まず「はい/いいえ」という答えて済む形式(例: 「行くんですか」 ↔ 「行きますか」)がある。また、自分の推定を相手に問いかける際は、「学生なんじゃない、いいんじゃない、見たんじゃない」のように「のではない(か)」形式が使われるが、相手に認識を要求する際は「学生じゃない、いいじゃない、見たじゃない」のように「の」のない「ではない(か)」形式が使われる。これらの形式を「のだ文」に対する「ゼロ形式(「∅」)」と表記する。

これらの「のだ文」と「ゼロ形式」の意味機能について、田野村(1990)と野田(1997)の研究を参考し、表1のようにまとめた。それぞれの用法に関しては、4.1節の選択テストの調査内容を参照されたい。

[表1] 「のだ文」の意味機能

	のだ / のではない (か)	∅ + ではない (か)
意味機能	説明 (=理由=解釈) / 説明要求 発見 意思表明 (+同意要請) 推測 前置き 命令 強調・念押し	知識の活性化 (+同意要請) 再認識 非難 励まし

### 3. 調査概要

#### 3.1 インフォーマントの構成

本稿でのインフォーマントは、B学校の中学校1年から高校1年までの68名である。インフォーマントの学年・男女の構成は表2を、彼らの滞日期間の状況は図1を、それぞれ参照されたい。

図1は、個人の滞日期間順に並べたものであり、ここでの個人の順番の1が日本での滞日期間が一番長く、68にいくほど滞日期間が短い。記述においては個人の順番を個人



文法テスト調査では、先行研究を参考し20問を用意した。作文とインタビューの調査においては、作文を書いてもらい、30分後ネイティブによる1対1のインタビュー調査を実施した。インタビューではこのテーマ以外にも他のいくつかのタスクを行い、最後に作文の内容を口頭で語ってもらう形式をとった。また、比較のため、対になるよう日本語のデータと同様、韓国語のデータを得ている。

インタビュアーは、それぞれの言語の母語話者とし、日本語の担当者は生徒と面識のない筆者の知人(1名)が68名すべて同じ形式でインタビューをした。韓国語のインタビュアーは、生徒と面識のない筆者の知人(2名)が担当した。

作文データの場合、書いてもらった文字数で数えた結果、68名の一人当たりの平均値は、日本語201.43文字、韓国語189.93文字であり、インタビューデータも同じ内容を語ってもらったため、同じ情報量と見なされる。

## 4. 選択テストの調査内容とその結果

### 4.1 選択テストの調査内容

日本語の「のだ文」の使い分けについて、20問の選択テストを行った。テストでは「のだ」形式と「の」のないゼロ形式を対立させ、2択とした。しかし、テストの1～20問のうち、「のだ文」とゼロ形式のどちらも可能な場合や誤字があった4問は分析対象外にした。16問のうち、「のだ文」の「ん」が入った正解は12問、ゼロ形式の正解は4問であり、「のだ文」に偏っていた。

テストで用いた「のだ文」の問題は、次のような内容であった。以下の例での下線\_\_\_\_の部分、正解を表す。

- (1) 「説明」の用法：1問  
 <4番> (隣の人が帰り支度を始めたので) A：早いですね。  
 B：ええ、ちょっと用事が(あるんです/あります)。
- (2) 「意思表示」の用法：2問  
 <1番> これは少し(難しいん/難しい) じゃないかと思う。
- (3) 「説明要求」の用法：5問  
 <3番> (普段ネクタイをしていない人がネクタイをしていたので)  
 A：おや、今日は何か(あるんですか/ありますか)？  
 B：就職の面接に…。
- (4) 「前置き」の用法：2問  
 <10番> 本町に(行きたいんですが/行きたいですが)、どのバスに乗ったらいいんですか？
- (5) 「知識の活性化」の用法：2問  
 <15番> ほら、同級生に 林って(いたじゃない/いたんじゃない)？

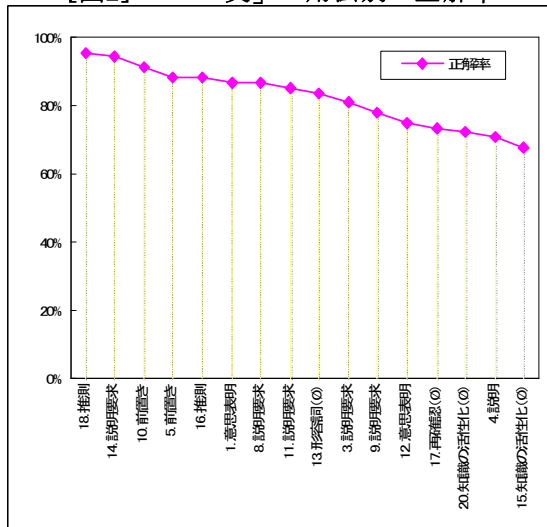
- (6) 「推測」の用法：2問  
 <18番> 昨日の事故は 被害者にも 責任が (あるじゃないかな/あるん  
 じゃないかな)。
- (7) 「再確認」の用法：1問  
 <17番> あそこに 郵便局が (見えるじゃないですか/見えるんじゃないですか)?

## 4.2 選択テストの調査結果

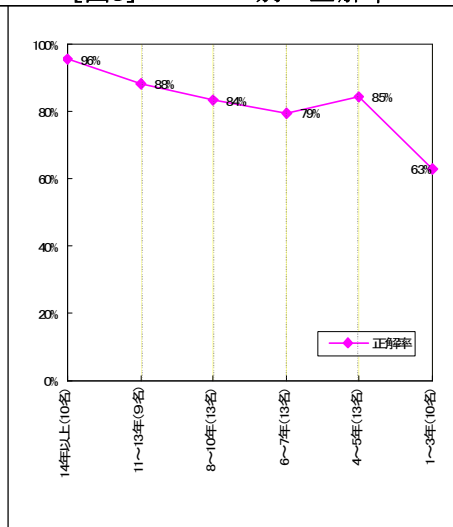
これらの選択テストの調査結果(3)を、次の図2に示した。さらに、図3には、滞日期間の差による6つのグループ別に正解率を示した。

図2をみると、全体的に正解率は高く現れたが、80%以下は「9.説明要求」～「15.知識の活性化」の6問である。特に「のだ」をつけた形式は正解率が高く現れたが、ゼロ形式の場合、いずれも正解率は低い。さらに、図3をグループ別にみると、「14年以上」のグループは96%を占めているが、「1～3年」グループは63%に留まっている。このことから、滞日期間が長くなるにつれ、「のだ文」の習得も進んでいくことが分かる。しかし

【図2】「のだ文」の用法別の正解率



【図3】グループ別の正解率



「1～3年」グループ以外のグループは、正解率においてそれほど差がないことから、選択テストの結果からは、滞日期間による差が得られなかった。

(3)テストは、2項選択であったため、文法知識を図る基準としては信頼性にかけているともいえるが、分析対象外とした19番の例から、彼らの「のだ文」の文法知識を測れる資料として用いることができると判断した。19番：このような機会はめったに (①ないじゃないかですか/②ないんじゃないかですか)?」では、「知識の活性化」の例として、①を正解としたが、「ん」が挿入されてしまい、問題として成立していなかった。強制的に1つを選択するように指示したため、①の選択率は14%、②の選択率は86%であった。このことは、誤字を勘案すると①より②が妥当であると思い、信頼できるテストであったと思われる。

## 5. 作文とインタビューの調査内容とその結果

### 5.1 作文とインタビューの調査内容

作文とインタビューの調査内容は、「今まで一番記憶に残っている先生(友達)」に関する内容であり、比較のため日本語と韓国語の同じデータをとった。以下は、例として個人番号13番の日本語の作文とインタビューのデータを提示した。 の部分は文法的なエラーと判断した部分である。

#### ◆ 作文データの内容

---

その子は 私が 5年生の 時に 出会った 友達で 3年間 ずっと いっしょにあそんだ 大切な 友達です。その子に はじめて 会った 時は ちょっと こわそうだったので うまく 話を かけられなかったのですが、〇〇が 私に 話 がけてきてくれました。私より すこし 背が 高く て 笑う顔が とても かわいい 彼女は 勉強もよくできるし、相手の心を いやすことのできるあたたかい 友達です。今は、韓国に 帰って 会えないけれど、韓国に あそびに いった時は 必ず 会って あそびます。3年間 一緒に 笑って 泣いて、時には ケンカもした 友達だから その子が 一番 きおくに 残る 友達だと 思います。 <個人番号13番>

---

#### ◆ インタビューデータの内容

---

えーと その子は 〇〇〇と 言うんですけど 私が 5年生のときに 出会った 友達で、えーと 3年間 中2の時まで ずっと 一緒に いてきて すごく 仲が 良かったんですよ。で その子は うーん すごく 頭が 良く て とても 親切で すごく 悲しいときとか 一緒に 泣いてくれたりして 私のことを すごく 大切に してくれるって 思って それからも ずっと 2、3年間 一緒に 笑ったり 泣いたりして 一緒に してきたから その子が 一番 大切な 友達だと 思います。 <個人番号13番>

---

### 5.2 エラーの判定基準

分析のために、作文とインタビューのデータから中間言語を収集した。この際、作文データでの漢字などの表記上の誤り、インタビューデータからの音声的な誤りはそれぞれ対象外にした。中間言語の個別的な誤りをエラー(error)、誤用などいくつかの用語が使われているが、ここではエラーと統一し、記述する。

エラーの判定基準としては、「文法性 (Grammaticality) 」と「受容可能性 (Acceptibility) 」が用いられる。これらは、Lyons(1977)によって定義された用語であるが、「文法性」とは意味的・形態的に完成された言語形式を備えることであり、「受容可能性」とは文脈内で自然で捉えられる、談話的な次元で許容されることである。本稿

では、これらの「文法性」と「受容可能性」のどちらか、または両方で誤りが見られる場合、エラーと判定する。この概念は、「非文法的」という固定的な概念とは、「校正可能性」があるかどうかという点で大きく異なる概念である。すなわち、Lyons(1977)によると、非文法的な発話は、母語話者が受容可能性であるが、校正可能であるものと捉えている。従って、「文法性」よりその許容範囲を広く捉えることにする。

また、本稿では日本語のデータと韓国語データがペアになっており、「文法性」と「受容可能性」のレベルを両言語それぞれ同じレベルで適用することも重要である。そのため、データのエラーの処理は、日本語母語話者・韓国語母語話者1名ずつに判定を依頼し、全データを判定してもらった。この資料をもとに、多数の母語話者の意見を参考にし、最終的には、筆者の判断でエラーの判定を行った。

### 5.3 作文とインタビューの調査結果

分析においては、全体的なエラーの傾向を概観し、「のだ文」の使用頻度および使用形式を分析した上で、彼らの滞日期間による「のだ文」の習得状況を明らかにする。

#### 5.3.1 全体的なエラーの傾向

インフォーマントの68名の個人別に、作文のデータから収集したエラーを図4に、インタビューのデータを図5に、それぞれ示した。

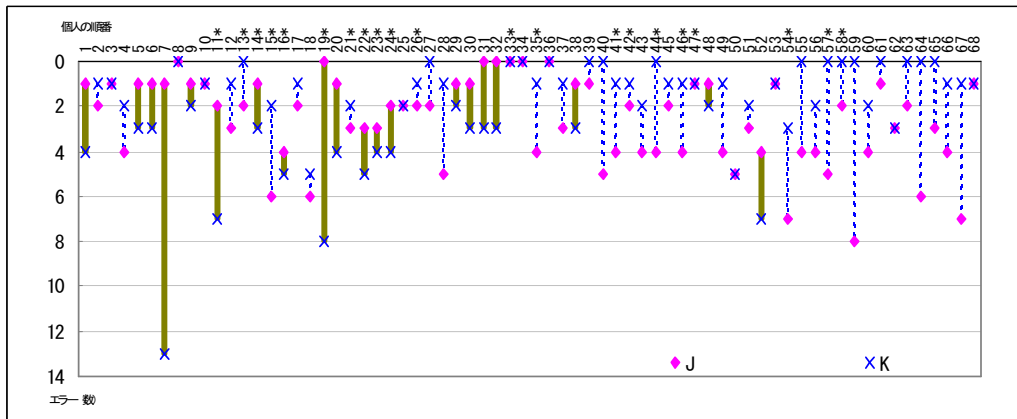
図4と図5では、上に位置するほどエラーは「0」に近く、日本語の場合「◆」で韓国語の場合「×」で区別した。また、日本語と韓国語のエラーの差は線でつなげ、縦線の長さで、日本語と韓国語のエラーの差を表す。さらに、エラーの頻度において日本語のほうが少ない場合は「|」、韓国語が少ない場合は「:」でそれぞれ示した。これによると、作文の場合、日本語のエラーは178で韓国語のエラーは139、インタビューの場合、日本語のエラーは113で韓国語のエラーは89となっており、いずれも作文また日本語のエラーが多かった。

図4の作文データでは、中央から左側は「|」の線が多く、右側は「:」が多く見られており、さらに、その長さは中央から両端に行くほど長く現れている。また、滞日期間の長い生徒の場合、日本語のエラーが韓国語より少ないものの日本生まれの生徒でもエラーが多数見られた。これに対し、滞日期間の短い生徒の場合、韓国語のエラーは「0」に近いものの、韓国語のエラーが見られる生徒も少なくなかった。すなわち、バイリンガル韓国人中高生は、両言語それぞれにおいて中間言語が見られた。特に、彼らは年少者であるため、両言語の影響を共に受けやすく、それぞれの言語に有する文法規則が完全に機能せず、エラーが生じていることを示唆する。

図4に比べ、図5のインタビューデータでは、同じ内容を語っても、作文データほど滞日期間による差がはっきり見られなかった。また、個人差があるものの滞日期間の短い生徒

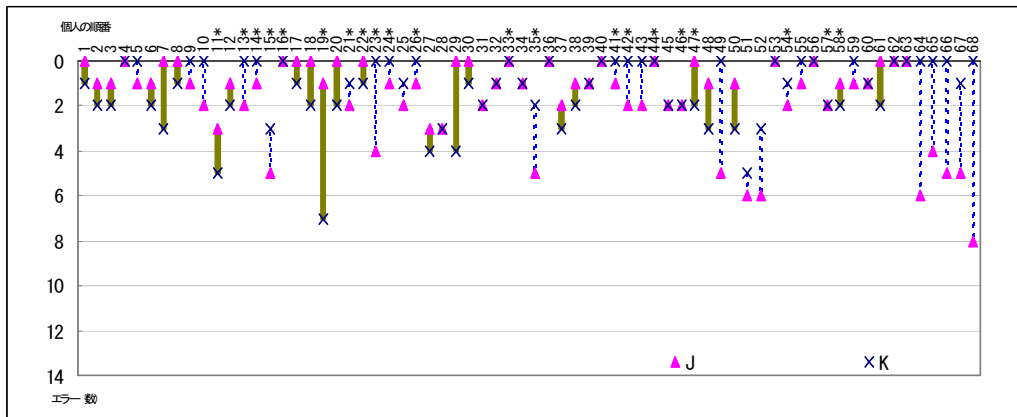
の何人かを除けばそれほどの一貫性が見られない。このことから、書き言葉より話し言葉で何らかのストラテジーで対応できることが考えられる。

【図4】 作文データにおける全体的なエラー J(n=178) K(n=139)



※個人の順番の\*の印は、以前滞日した経験があることを示す。

【図5】 インタビューデータにおける全体的なエラー J(n=113) K(n=89)



※個人の順番の\*の印は、以前滞日した経験があることを示す。

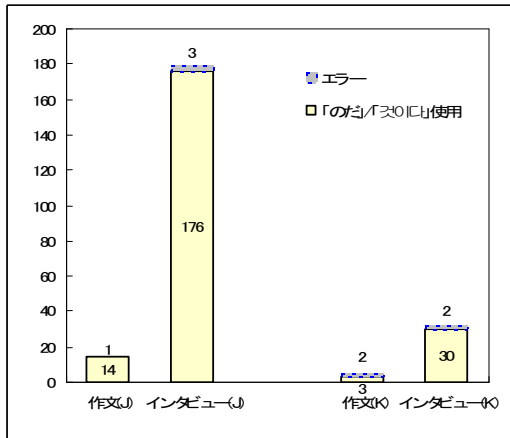
### 5.3.2 「のだ文」の使用頻度

「のだ文」と「것이다文」の使用頻度は、データ別に図6に示した。さらに、滞日期間の差による6つのグループ別に、日本語と韓国語とに分けて、図7と図8に示した。図7と図8での数値は、各グループに属する一人当たりの平均値である。

まず、図 6 をみると、日本語と韓国語での「のだ文」の使用頻度は、どのデータにおいても日本語での使用が多く、韓国語では全体的に少ない。日本語のうち、作文よりインタビューでの使用頻度ははるかに高く現れた。同じく「一番記憶に残っている先生（友達）」を語っても、データ別の「のだ文」の使用頻度は大きく違っていた。このことから、「のだ文」は、話し言葉として自由自在に使えても、書き言葉ではうまく使えないのが現状

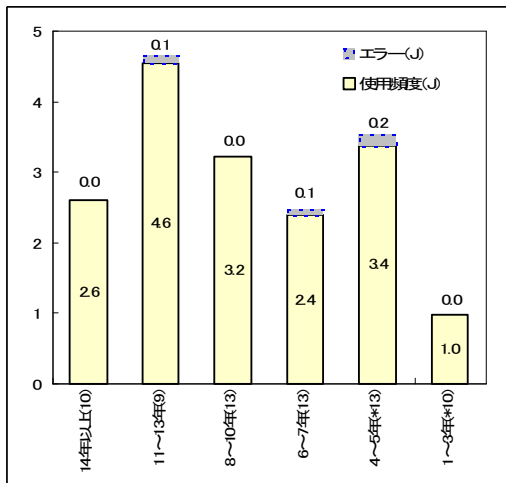
であることがうかがえる。また、韓国語では、日本語ほど「のだ文」が使われていない。言い換えると、日本語を使う際は、韓国語より「のだ文」を積極的に取り入れるべきであるともいえる。

【図6】データ別の「のだ文」の使用頻度

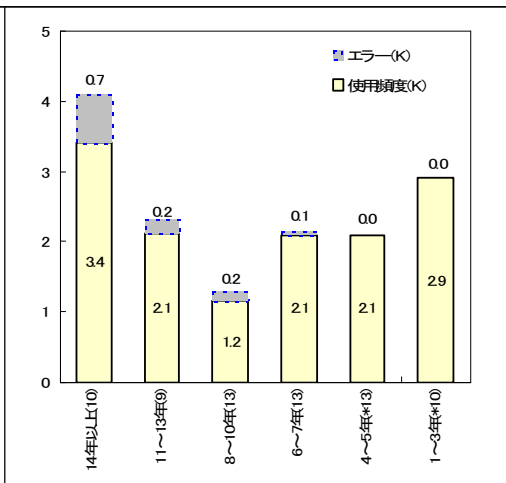


次に、図 7 と図 8 をみると、図 7 の日本語では「1～3年」以外のグループでは「のだ文」の使用が多く見られるが、「1～3年」のグループは他のグループの半分にとどまっている。すなわち「1～3年」は、まだ「のだ文」をうまく使えないことが見受けられる。しかし、エラーはどのグループでも目立った傾向は見られなかった。

【図7】日本語の「のだ文」の使用頻度



【図8】韓国語の「것이다文」の使用頻度



※グループに属する一人あたりの使用およびエラーの平均値)

次に、図8の韓国語では、「것이다文」の使用頻度が一番多く見られたのは、滞日期間の一番長い「14年以上」のグループであり、エラーも多く見られた。これは、日本語の影響により、韓国語でも「のだ文」を多用し、場合によってはエラーが生じていたことを意味する。しかし、「1～3年」のグループの使用頻度は多いものの、他のグループに比べ目立つほどではないことから、韓国語での「것이다文」の使用自体がそれほど多くないことがうかがえる。

すなわち、日本語と韓国語の「のだ文」と「것이다文」は、意味機能の面では、宋(1998)と崔(2006)の指摘のようにほぼ一致していても、その使用頻度には差があることが分かった。

### 5.3.3 日本語の「のだ文」の使用形式

「のだ文」の働きは複雑であり、特に、従属節(「～んですが」「～んですけど」など)、文末(「～んです」「～んですよ」「～んですね」「～んですよね」など)、否定疑問形(「～んじゃない」など)によって接続助詞の形式も意味機能も異なってくる。作文とインタビューのデータに使われた「のだ」文の使用形式は、表3と表4に、それぞれ滞日期間の差によるグループ別にまとめて示した。

表3と表4では、「～のんですけど」「～のんですが」の従属節の「前置き」の用法は共通的に見られたが、「～のですよ」の文末の「説明」の用法は、インタビューデータに限って見られた。また、「～じゃない」という形式は、論理的な「意見表明」の用法

[表3] 作文データに見られる「のだ文」の形式

	～んですけど	～の(ん)ですが	その他	計
14年以上(10名)	0	2	0	2
11～13年(9名)	0	1	0	1
8～10年(13名)	2	0	0	2
6～7年(13名)	0	2	0	2
4～5年(13名)	0	4	1	5(*1)
1～3年(10名)	0	1	1	2
計	2	10	2	14(1)

※ 「～の(ん)ですが」のうち、「～んですが」の1例以外は「～のんですが」である。

※ ( )の中の数字はエラー数であり、\*印は非用によるエラーである。

【表4】 インタビューデータに見られる「のだ文」の形式

	～んです(だ)けど	～んですよ	～んですね	～んですよね	その他	計	〇+じゃない
14年以上(10名)	14	9	1	0	0	24	0
11～13年(9名)	22(1)	12	1	1	4	40(1)	4
8～10年(13名)	23	12	4	0	1	40	4
6～7年(13名)	21	7	1	0	0	29(*1)	1
4～5年(13名)	25	7	0	2	2(1)	37(1)	0
1～3年(10名)	1	5	0	0	0	6	0
計	106(1)	52	7	3	7(1)	176(3)	9

※ 「～んです(だ)けど」のうち、「～んだけど」の頻度は12例以外は「～んですけど」である。

※ ( )の中の数字はエラー数であり、\*印は非用によるエラーである。

で使われるため、今回の話題では出現しなかった。一方、「〇+じゃない」という形式はインタビューの際、インタビュアーに向かって「知識の活性化」の同意要求の用法で用いられている。すなわち、それぞれ「のだ文」の使い分けに適用した使用傾向が見られた。特に、滞日期間の「1～3年」のグループにおいても、「～んです(だ)けど」「～んですよ」の形式は導入されていることから、「のだ文」は用法的に難しくても、会話では早い段階から用いられることできることと、さらに日本語教育でも早い段階から導入すべきの文法項目であることを示唆する。

実際の使用例は、次の(例1)～(例5)である。(例1)(例2)は「前置き」の用法、(例3)は「説明」の用法、(例4)は「知識の活性化」のゼロ形式、(例5)は「その他」の例として「んですか」の「予測」用法が、それぞれ使われている。

#### ◆ 「のだ文」の使用例

- (例1) その子は 1 学期の時 私のクラスの班長を やっていたのですが、(8番：作文)  
 (例2) その先生は 英語の 先生なんですけど、(2番：インタビュー)  
 (例3) 独り言で しゃべたら 教務室に 走って え～ みかんを 持ってきてくれたんですよ。  
 (40番：インタビュー)  
 (例4) やっぱり 塾の先生って なんか 冷たいじゃないですか。(27番：インタビュー)  
 (例5) 新しく 数学を また 始めるじゃないんですか。(14番：インタビュー)

すなわち、「のだ文」の使用実態は、「前置き」の「～んですけど」の使用頻度が一番多く使われており、その次に「～んですよ」「〇+じゃない」の使用が多かった。このような傾向は、山内 (2004) でも、K Yコーパスを分析し、超上級のレベルで4文字以上の語彙のうち、一番多く使われた「のだ文」の形式は、「んですけ」であり、その次に「～んですね」「～んですよ」「～んですよね」の形式であった。さらに、伊豆原 (1997) で

も、母語話者の講演などの独話文の分析から、「のだ文」のうち、「～んですね」「～んですけれども」の形式が多く使われていたことを報告している。

今回のデータは、自分のエピソードを取り上げているため、「～んですね」「～んですよね」の出現は見られなかったが、「～んですけど」と終助詞と結びついた「～ですよ」という形式が多く使われていることは、「のだ文」の使用を適切に行っており、「前置き」「説明」の用法に適用しているといえよう。

一方、母語話者にはあまり見られないタイプのうち学習者に見られる形式として「～んです」で終わる形式を指摘するが、本稿のデータからは1例しか見られなかった。これは現地での日本語習得が何らかの影響を与えているのだらうと思われる。

日本語の「のだ文」のエラーは4例が見られた。そのうち(例6\*)(例7\*)は、「のだ文」が使われるべきところで使用されていない例であり、(例8\*)は「のだ文」を使ったことによるエラーが見られた例である。

◆ 「のだ文」のエラーの例

(例6\*) 何と先生は私のおばあさんと 同年でした(→だったのです)。(46番：作文)

(例7\*) 数学の先生ですけど、すごい やさしいし、楽しいですよ(→楽しいんですよ)。(34番：インタビュー)

(例8\*) で今は韓国にかえ 帰りましたんですけど (→帰りましたけど) (15番：インタビュー)

5.3.4 韓国語の「것이다文」の使用形式

日本語の「のだ文」と同様、次の表5と表6では、滞日時期の差によるグループ別の作文とインタビューのデータに見られた「것이다文」の使用頻度を示した。

【表5】 作文データに見られる「것이다文」の形式

	~ 것입니다 [~のです]	~ 것이다 [~のだ]	~ 거야 [~のだ]	計
14年以上(10名)	1(1)	0	0	1(1)
11~13年(9名)	0	1(1)	0	1(1)
8~10年(13名)	0	0	1	1
6~7年(13名)	0	0	0	0
4~5年(13名)	0	0	0	0
1~3年(10名)	0	0	0	0
計	1(1)	1(1)	1	3(2)

※ ( )の中の数字はエラー数である。

【表6】 インタビューデータに見られる「것이다文」の形式

	~거든요 [~んですけど]	~거예요 [~んですよ]	計	∅+잖아요 [∅+じゃない]
14年以上(10名)	5	0	5	0
11~13年(9名)	3 (1)	0	3 (1)	2
8~10年(13名)	3 (1)	0	3 (1)	2
6~7年(13名)	4	1	5	6
4~5年(12名)	5	0	5	1
1~3年(10名)	5	2	7	0
計	25 (2)	3	28 (2)	11

※ ( )の中の数字はエラー数である。

作文データでは、「것이다文」の使用例は、3例にすぎないが、「~것입니다[~のです]」「~것이다[~のだ]」「~거야[~のだ]」などいずれも「説明」の用法である。しかし、インタビューのデータでは、日本語と同様「~거든요[~んですけど]」「~거예요[~んですよ]」「~잖아요[∅+じゃない]」の形式が見られたものの、「~거예요[~んですよ]」の使用頻度は少ない。また、どのグループでも、インタビューデータにおいては「前置き」の用法の使用頻度が高く現れていた。

実際、「것이다文」が使われた例は、次の(例9)~(例12)のような文であった。そのうち、(例9)~(例11)は「前置き」の用法であり、(例12)は「知識の活性化」による同意要求として使われているゼロ形式の使用例である。

#### ◆ 「것이다文」の使用例

(例9) 그 제가 3학년까지 계속 일본학교에 있었거든요. (5番：インタビュー)

(例10) 초등학교 4학년 때 임정민 선생님이라고 계셨는데 담임선생님이셨거든요. (42番：インタビュー)

(例11) 여자 쌍둥이인데 지금 7년된 친구거든요. (67番：インタビュー)

(例12) 대개 긴장도 되고 친구도 못 사귀고 그렇잖아요. (47番：インタビュー)

韓国語での「것이다文」のエラーは、日本語と同じ4例が見られた。(例13\*)のエラーは、理由を表す「때문」との混同によるエラー、(例14\*)の「のだ文」の付加によるエラー、(例15\*)は「ほとんど韓国語ができなかったじゃないですか。」のように「∅+じゃない」が使われ「知識の活性化」の同意要求としては不適切な場面で使われた例であった。

#### ◆ 「것이다文」のエラーの例

(例13\*) 내가 그 선생님을 가장 기억하고 있고 좋아했었던 이유는 그 선

생님이 미술선생님이었던 것입니다 (→미술 선생님이었기 때문입니  
다). (6番：作文)

(例14\*) 여러가지 도와줬거든요. 저를 위해서. 그래서 제일 인상이 깊었거  
든요. (→깊었어요.) 그 선생님이요. (11番：インタビュー)

(例15\*) 제가 거의 한국말을 못했잖아요.(→못했거든요.) (21番：인터뷰어)

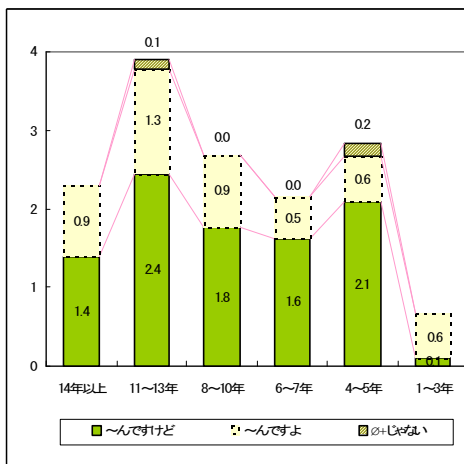
### 5.3.5 滞日期間による「のだ文」の使用実態

滞日期間による「のだ文」の使用実態は、次の図9と図10に示した。ここでは、作文とインタビューのデータをまとめ、「のだ文」の形式の割合を共にしめた。グラフの数値は、各グループに属する一人当たりの平均値である。

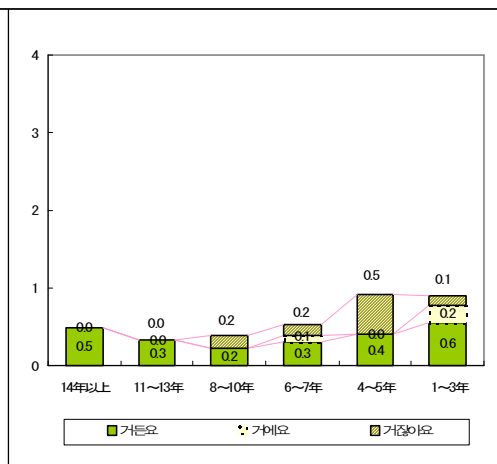
図9と図10は対照的であり、韓国語では日本語ほど「のだ文」が使われていない。日本語では、滞日期間の長いグループでは「のだ文」の使用が多く見られるが、短い「1～3年」グループでは、使用頻度が少なかった。さらに、韓国語では、滞日期間の短いグループの「것이다」の使用頻度が多いものの、長いグループでも多く使われており、そのうち、長いグループでのエラーが頻出していた。

使われた形式の割合をみると、日本語の場合、滞日期間3年以上になると「前置き」「説明」の用法は活発に使われている。すなわち、「のだ文」は用法は複雑であるものの、滞日中の自然習得の影響で、母語話者、超上級者と同じように「～んですけど」「～ですよ」「〇じゃない」の形式を習得することには大きな困難がないことがわかる。ただし、これらは話し言葉であり、作文のデータが少なかったため、書き言葉として運用できるかどうかまでは確認できなかった。

[図9] 「のだ文」の使用実態



[図10] 「것이다文」の使用実態



## 6. まとめ

バイリンガル韓国人中高生は、日本で生活しており、それぞれ来日時期が異なるため、日本語能力にも差異が見られる。本稿では、彼らの68名を対象とし、選択テスト、作文、インタビューの3つのデータを用い、滞日期間による「のだ文」の習得状況を分析してきた。その結果から、以下の3点が明らかになった。

- (1) 日本語の「のだ文」では、全体的に「前置き」の「～んですけど」や「説明」の「～ですよ」が多く使われていた。このような傾向は、滞日期間の3年以上の者に共通的に見られ、さらに母語話者の「のだ文」の使用実態に近い傾向であった。このことから、「のだ文」のうち「前置き」「説明」の用法は、日本語教育の観点からも早い段階から取り入れるべきであると思われる。
- (2) しかし、「のだ文」は話し言葉としては活発に取り入れるようになっても、書き言葉としてはうまく使えないのは実態であった。
- (3) 韓国語での「것이다文」の使用は、滞日期間の長い者も短いものも日本語ほど多用していないことが分かった。しかし、滞日期間が長くなると「것이다文」の多用の傾向があり、それによるエラーが見られた。

## 【参考文献】

- 최진희·조남성(2007) 「한국인 일본어 학습자의 「のだ」의 기능별 사용현황에 관한 고찰」 『日本文化学会』 34, 한국일본문화학회 pp.145-164
- 崔真姬(2006) 「「のだ」と「것이다」の対照研究—文法化の度合いの違い—」 『日本文化学会』 29, 한국일본문화학회 pp.27-42
- 伊豆原英子(1997) 「独話文における「のだ」の表れとその機能—独話教育のための基礎的研究(1)—」 『日本語・日本文化論集』 5, 名古屋大学留学生センター pp.49-68
- 生越直樹(2005) 「在日コリアンの言語使用意識とその変化」 『在日コリアンの言語相』 和泉選書 pp.11-52
- 宋承姬(1998) 「文末における韓国語の「-것이다/geosida」と日本語の「の」の対照研究—「-것이다/geosida」と「のだ」を中心に—」 『広島大学学部紀要 第二部』 47 pp.267-274
- 野田春美(1997) 『「のだ」の機能』 くろしお出版
- 野田尚史(2001) 「第6章 文法項目の難易度」 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店 pp.101-120
- 田野村忠温(1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院
- 山内博之(2004) 「語彙習得研究の方法—茶釜とNグラム統計」 『第二言語としての日本語の習得研究』 7, 第二言語習得研究会 pp.141-161
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge University Press.

## 要 旨

本研究における「バイリンガル韓国人中高生」とは、現在日本に住み、日本で日常生活を行うニューカマー韓国人年少者のことである。彼らは、来日時期からみると未就学児、小学生、中学生などさまざまであり、両言語の能力においても差異が見られ、場合によっては韓国語と日本語の両方を習得する必要がある。これらのことをふまえ、日本語学習者にとってもっとも習得しにくいと言われる「のだ」文の習得実態を明らかにすることを目的とする。

本研究で用いるデータは、68名の韓国系民族学校の生徒を対象とし、文法項目の選択テスト、作文、インタビューのデータを得た。作文とインタビューデータは、同じ内容の日本語のデータと韓国語のデータを得ている。

その結果、「のだ文」は滞日期間の短い生徒にエラーが見られるものの、全体的にはエラーは少なく、「～んですけど」「～ですよ」などの使用頻度が高かった。とくに「～んですけど」の「前置き」用法と「～ですよ」の「説明」用法は、滞日期間が3年以上になると会話に多く導入されており、母語話者の「のだ文」の使用実態に近いと言える。このことから滞日という状況による自然習得が進んでいると考えられる。韓国語での「것이다文」は、日本語ほど多用されないものの、滞日期間が長い生徒に「것이다文」を多用する傾向とそれによるエラーが見られた。

キーワード：のだ文、「것이다[geosidal]」、使用頻度、使用形式、バイリンガル韓国人中高生、滞日期間、中間言語

투 고 : 2008. 5. 31  
1차 심사 : 2008. 6. 14  
2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : (140-132) 서울시 용산구 청파동2가 9-2 302호  
電 話 : 010-4459-8508(휴대폰)  
e-mail : yangsun2@hanmail.net